

保育者・教員養成課程における「ソルフェージュ」指導法の考察

— 音楽能力測定テストを通しての指導法対策と学生の意識変化 —

内田 恵美子

東海学院大学短期大学部幼児教育学科

要 約

保育者・初等教育教員養成校（以下教員養成校とする）においては、学生が現場に出て即戦力となる音楽基礎知識を身に付けさせる必要がある。短期間で学ぶべきことが多く難しい状況ではあるが、その中で効率よく必要なことを学べるよう、今回ソルフェージュ授業を通して2年生のソルフェージュ履修者46名の学生に対し「音楽能力測定テスト」（以下「測定テスト」とする）を実施し、「音感」「リズム感」「読譜」それぞれの能力を調査した。学生個々の能力を分析し、その結果をもとに現状を把握し今後の課題発見と指導方法の考察をした。またテストを行うことにより、学生が自分の実力に向き合い、課題を明確にさせ、今後のソルフェージュへ対する取り組み方の変化を観察した。

キーワード：音楽基礎知識 音楽能力測定テスト 音判断 リズム判断 読譜能力

1. はじめに

保育者・教員養成校では、主にピアノを用いた音楽教育がされており、保育現場、教育現場で発揮できる実践力を持った学生の育成が求められている。

しかし本学入学時のアンケートによると学生の約半数近くがピアノ未経験者であることや（内山 2015, p.89）¹、ピアノ等の楽器経験者でありながら音楽基礎知識が不足する傾向が見られ、限られた時間でのピアノ技術を主とする音楽能力の習得は容易ではない現状である。音楽基礎知識とは、楽典を基盤としたピアノ演奏や歌唱等に必要、読譜・視唱・音楽理論のことを示す。これらを得るにはかなりの時間と努力が必要であるが、ここでは保育者・教育者に必要とされる演奏技術力を短期間で身に付けるための指導内容の検討が必要であると考えた。

演奏技術力とは、楽譜に記された音楽的内容を正確に再現する技術であり、それには「読譜力」と「身体的訓練」が不可欠である。さらに保育者・教育者に必要な演奏技術とは、高見仁志・前川尚子（2007, p47）は「様々な幼児の歌をレパートリーとして弾き歌いできる技術」や「子どもの身体表現を引き出すような即興演奏の技術」と述べているように、高度な曲を楽譜通りに弾けるよりも「幼児・子どもに歌って聴かせる」または「幼児・子どもたちが歌える」ための演奏技術が必要であり、楽譜を正確に弾く技術の他に子ども達を観察しながら臨機応変に演奏する技術が求められている。つまり、演奏技術のみでなく、観察力や即興技術も必要なのである。実際保育士試験でも一般楽譜を使用する以外に、コードネームでの演奏も選択可能となっており、さらに現場におい

ては子どもの動きに合わせて弾くピアノ即興演奏技術も必要とされることも多い。そのため保育士・教員養成校では、楽譜からピアノを演奏するために必要な情報を得ることができ、またその必要な情報は何かを理解できているかという「読譜能力」と、読譜したものを再現することや即興的に演奏できるための音感と技術を身に付けるという「身体的訓練」のサポートが不可欠であると考えられる。

よって本研究は、学生が実践力として展開できる音楽基礎知識を得るためのソルフェージュの有効的な指導方法の考察を目的としたものである。

2. 研究の方法

ソルフェージュ後期1回目の講義において2年生のソルフェージュ履修者46名の学生に対し、聴き取りと筆記での測定テストを実施し、そこから読譜能力やリズム感、音感等の能力を分析し、その結果をもとに現状を把握し今後の課題発見と指導方法の考察をした。また、今回の測定テストの結果通知と共にこのテストを受けての意識アンケートを行い、テスト実施前と後との意識を調査した。

3. 研究の内容

(1) ソルフェージュ教育の目的と問題点

ソルフェージュとは西洋音楽の学習において読譜を中心とした基礎訓練であり、前述した演奏に必要な音楽基礎知識を身に付け、さらに音楽に対する理解度を深めるとともに、音楽表現へと発展させるためのものである。

本学においては楽典、新曲視唱、リズム視唱、楽曲分析、コードネーム、歌唱、そしてピアノ個人レッスンと、保育者・教育者として必要な音楽基礎知識を習得し、実習や採用試験に対応すべく授業を展開している。具体的には、楽譜に記されている拍子・音程・調性を正確に読み取り演奏する、又は弾き歌いのための能力向上をさせ、さらには簡単な伴奏付けができる能力を身に付けることを目標として授業を行っている。

ソルフェージュの理論講義ではコードネームでの伴奏付けをも取り入れており、ピアノでは現在でも多くの保育者・教員養成校で使用されているバイエル教本を導入として使用している。バイエルの特徴のひとつとして全体を通して左手が定型的な伴奏で、右手が単純な旋律という曲が多い。日本にはアメリカの音楽教育者メーソンによって明治時代（1876年）に主に小学校唱歌を指導する音楽教師のピアノ学習用として持ち込まれた。当時の小学校は賛美歌のメロディが引用されることが多く、小学校の音楽の先生としては、伴奏を付けて賛美歌が弾ける程度のピアノの力量があれば十分であり、バイエルはその程度のテクニックを短期的に身につけるために最適だったのである。

これは現代の現場においても同じであり、現場では子どもが歌えるということを前提に、右手で旋律を弾くまたは歌いながら、左手や時に両手である程度パターン化した伴奏を弾くことになる。これを踏まえて講義ではいくつかの伴奏パターン、定型をも身につけるよう指導している。

しかし、ほとんどの学生がソルフェージュ教育を初めて受けることや、前述のように経験者であっても音楽基礎知識の不足する傾向が見られ、1週間に1時間程度の時間のなかで理論から歌唱、ピアノまでを習得し発展させるには非常に困難な状況である。

また、本来ソルフェージュ教育の方法としては、個々の能力に即した個人指導または能力別での指導が理想であるが、現状はクラス授業であり、また、限られた時間の中では不可能な状況である。その中でも教員は、学生個々が持っている音楽性や創造力を引き出しそれを伸ばす指導方が求められるのであり、それには個々の能力を知り、考慮していくことが必要となる。

今回のテストにより学生それぞれの特徴を指導者が把握することで、学生の能力の特徴に合わせた課題を設定し与えることが可能となる。また学生本人も自分の能力の特徴を知り問題点が明確になり、目標をもってソルフェージュに取り組めるであろうと予測した。

（2）音楽適正テストの概要

アメリカの音楽心理学者、カール・シーショアによる『シーショア音楽才能テスト』（シーショア他 1919年）は、最初に標準化された最も有名な音楽適正テストである。（1）音高識別力、（2）音量識別力（3）リズム識別力、（4）音長識別力、（5）音色識別力、（6）音記憶力、の6種類のテストで構成されている。総合的な結果は、図1のように、6つのテストをグラフにまとめた能力プロフィールで示されている。

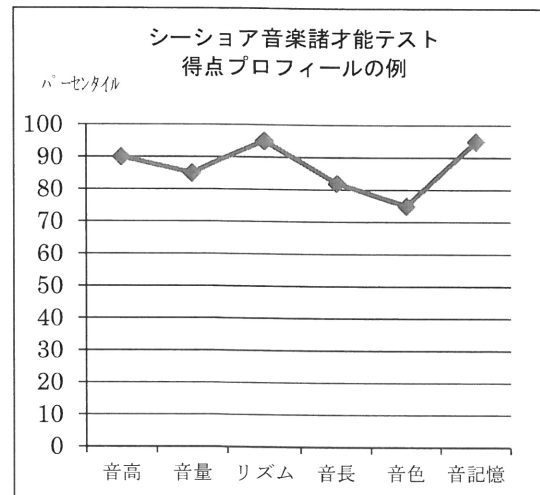


図1 シーショア音楽諸才能テスト得点の例

シーショアは、特定の感覚を測定したものであると考えており合計はせず複数の音楽的才能を測定する、音楽的諸才能テストと名づけた。シーショアは音楽的能力を、基本的な感覚の諸能力の総合によって構成されると考えており、この考え方に基づき音高、音の大きさ、音の長さ、音色、という音楽の構成要素について独立した聴覚的認知能力と、音の高さと長さについての最小限のまとまりをもつ旋律パターンとリズムパターンの能力を測定した。このテストは大きな反響を呼び広く用いられ、その後も多くの学者により様々な音楽能力テストが考案されてきた。その中でも、アメリカの音楽教育学者エドウィン・ゴードンは、シーショアのテストから発展させ、旋律・リズム・ダイナミクス・調性など様々な音楽の様相が複合された音楽フレーズについての理解力を測定しており、このテストは現在も使用可能である。

ただし音楽テストによって音楽性すべてを測ることは出来ないと考えられ、単に諸感覚能力を測定するだけであるという指摘が過去にもされてきたⁱⁱ。今回のテストは、シーショアとゴードンのテストを参考に、保育者・教員養成に必要な音楽的能力を把握し、指導に反映すべく筆者独自に考えたものである。

(3) 音楽能力測定テストの詳細

今回のテストでは普段ソルフェージュの授業において特に問題点だと感じる、「音判断」「リズム判断」「読譜」に着目し作成した。これらのテストを「音楽能力測定テスト」と名づけた。

「音判断」とは、まずは記譜されている音符を正しく読むことが大事である。講義では新曲視唱で音読みをさせ音程を取る訓練をしているが、ある音符が何の音であるか分かってそれを音としてイメージすることができない学生が多い。2度音程はほとんどの学生が正しく歌えるが、3度や4度になると正しく音が取れない。音符が読めても音のイメージができないと、それはある英単語を見たとき発音が出来ても単語の意味が分からず会話にはなかなか繋がらない状態であるように、単に音符が何の音を表しているかを読めるだけでは短期での演奏技術向上には繋がらない。ある旋律を見て瞬時に音を理解でき、また、そのまとまった音の並びや繋がった音と音との音程の関係を瞬時にイメージできることが、ピアノ演奏、さらに弾き歌い能力向上へ繋がるのである。

「リズム」は読譜時の大変重要な要素であると考えられることから、ソルフェージュの講義では、リズムに特化した訓練も行われている。ピアノを演奏する上のリズムとしては一定の拍を刻むことと記譜された音符の正しいリズムを再現することが必要である。今回のテストでは、4分音符・8分音符といった簡単なリズムでは音符一つ一つのリズム判断で理解できるだろうが、特にシンコペーションでは一定のリズム感を持っていないと理解することは難しいであろう。

「読譜」は前述したように、楽譜から演奏するに必要な情報を得ているかということである。譜読みの時、音記号・調性・拍子・調号・楽語等にまず目をやり、おおよその曲のイメージや注意することの情報を得てからピアノで演奏するのは当たり前であるが、学生達にこれら当り前のことができていないと思われることが多い。そこで今回このような現状を把握するため、調性・拍子・調号・楽語等を理解して楽譜に向かっているかを調査した。

上述したように、今回はソルフェージュにおいてピアノ演奏に必要な基礎的技術の中で「音判断」「リズム判断」「読譜調査」これら三つに絞って学生の能力を測定した。

5. 音楽能力測定テストの内容

今回のテストはソルフェージュの視点から「音判断」「リズム判断」「読譜能力」3つの要素から成るものである。各クラス7～10名で行い、シーショアの方法に倣い、

音の強さや長さを厳密に統制するため、ピアノではなく電子ピアノを使用した。

(1) 「音判断」

音程判断と調性判断に着目した。音程判断では、学生は似ている4つの2小節の曲を聴き、一致するものを解答用紙から選択した。子どもの歌によく出てくる2度・3度・4度の聞き分けができるかを調査したものである。(例題1) さらに調判定では、4つの異なった調性の同じ曲を聴き、一致する調の曲を選択した。(例題2)

例題1 2度の判定

正解 C

例題2 調性の判定

正解 C

(2) 「リズム判断」

リズム判断では、子どものうたによく出てくるリズム、分音符・8分音符・付点4分音符・16分音符・シンコペーションに着目した。似ている4つの2小節の曲を聴き、一致するものを解答用紙から選択した。

例題3 リズム判断 4分音符・8分音符

正解 B

例題4 リズム判断 16分音符・付点8分音符

正解 C

(3) 「読譜能力」

ある曲の楽譜を1分程見た後楽譜を伏せて別紙の質問に答えた。曲は子どもの歌によくある二長調2分の2拍子 Allegro の有名ではない曲を用意した。質問内容は、調性と調号について、拍子、速さ、伴奏パターンについてである。(例題5 6)

例題5 読譜調性

(1) 何調でしたか。下記から選んで○を付けましょう。
〔ハ長調 ニ長調 ホ長調 ヘ長調 ト長調 イ長調 イ短調〕

正解：ニ長調

例題6 読譜楽語

(5) 速さはどのような指示でしたか。
下記から選んで○を付けましょう。
〔 ゆっくり ふつう はやい 〕

正解：はやい

4. 分析結果

(1) 測定テスト

今回のテスト結果全ての正解率をパーセンテージにし個人別のグラフに表して平均点と個人の点数とを比較できるようにし学生に通知した。

グラフ次のように分類した。「音判断」は「音程判断」と「調性判断」に分けて表記し、「音程判断」は2度・3度・4度の判定をした。「リズム判断①」は4分音符・8分音符・付点4分音符の判定、「リズム判断②」は16分音符・シンコペーション、「読譜①」は調性・調号・臨時記号読み取り、「読譜②」は拍子記号・楽語・伴奏定型の判断とした。(図2)

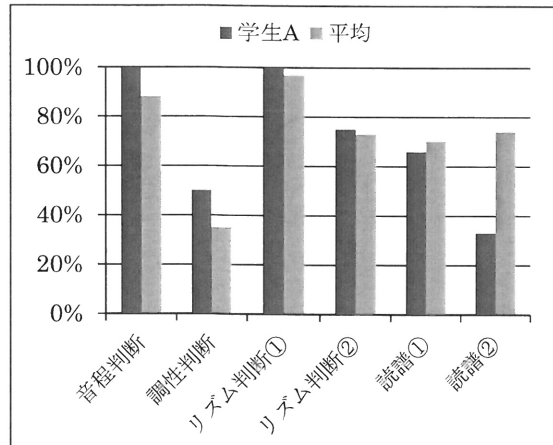


図2 ある学生の得点と平均点

また、テストすべての項目の平均点をグラフにした。(図3)

音程判断の正解率が高いが、調性の音判断は多くの学生が判断できていないことがわかる。

「リズム判断」も同様、4分音符・8分音符のリズム判断はできて、16分音符やシンコペーションといった多少複雑なリズムになると聞き取れていない学生が多い。

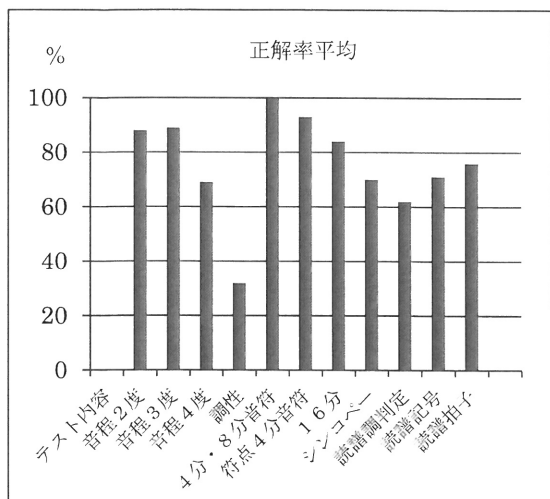


図3 受験者の正解率平均

「読譜」の正解率は全体的に低くなっている。調性や速さ記号は選択での回答であるのに正解者はおよそ6割である。

さらにここでは前期ピアノテストの得点と今回のテストの点数とを比較した。(ピアノの得点はエチュード5点満点、弾き歌い5点満点での合計点である。また、2年生の指導教員5名の採点を平均した得点である。)ここでは9.5点、8.5点、6点、4点の学生それぞれの音楽能力テストでの点数と平均点とを比べグラフとした。(図4 5 6 7)

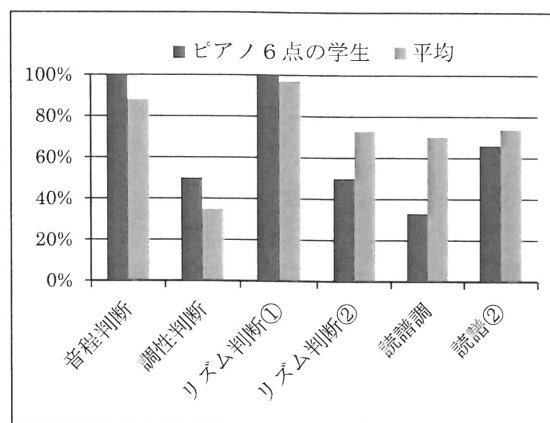


図6 ピアノ得点6点の学生と平均点の比較

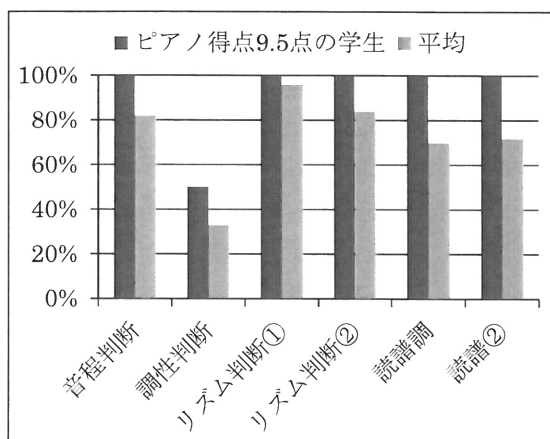


図4 ピアノ得点9.5点の学生と平均点の比較

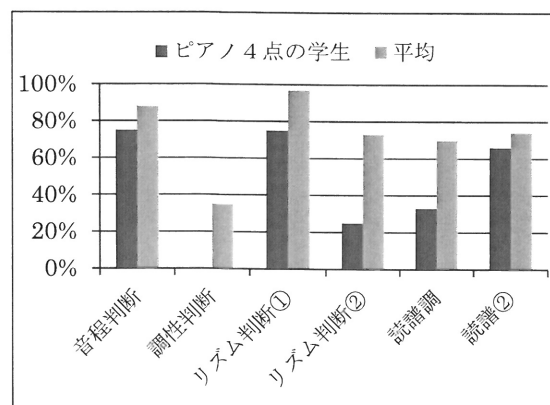


図7 ピアノ得点4点の学生と平均点の比較

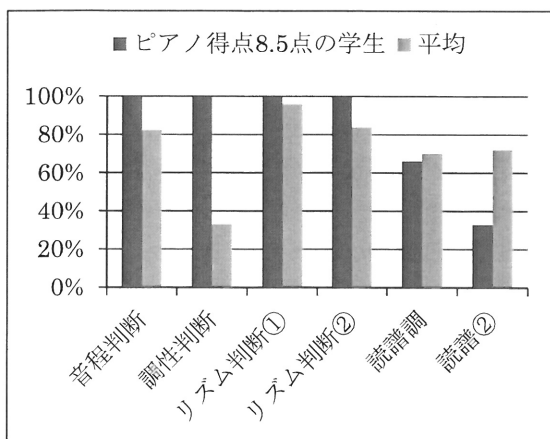


図5 ピアノ得点8.5点の学生と平均点の比較

(2) アンケート

今回の能力測定テストの結果通知と共にこのテストを受けての意識アンケートを行い、主に読譜に対してテスト実施前と後の意識変化を調査した。

アンケートの内容と結果は次のようである。

- ①これまで楽譜に対してこのようにじっくり見て取り組んでいたかどうか (図8)
- ②このテストを受けて楽譜の見方の意識が変化したかどうか (図9)
- ③②で変化があると答えた人はどのような点に意識の変化があったか 複数回答可 (表1)
- ④今回のテスト結果を見て感じたことは何か 複数回答可 (表2)

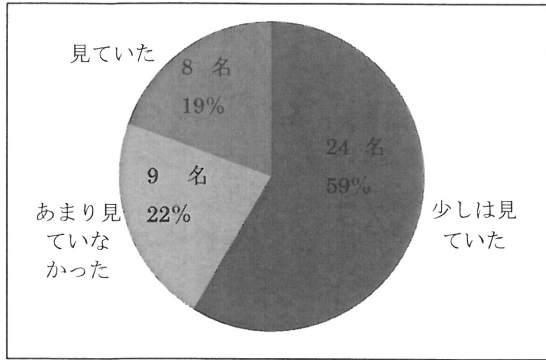


図8 楽譜を見ていたかどうか

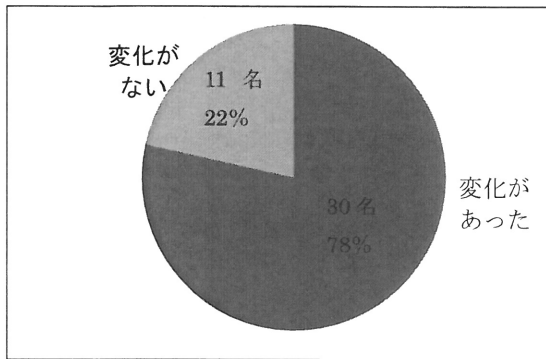


図9 意識が変化したかどうか

表1 どのような意識変化があったか

＃＼の意識をするようになった	13人
拍子やリズムを意識するようになった	10人
なんとなく弾いていたので注意深く見るようになった	7人
何調かを意識するようになった	6人
記号を意識して見る様になった	5人
音以外に見るべきものがあると気づいた	2人
短い時間でも大事な部分を見ることができる	1人
採用試験の初見課題の場合に対応する必要がある	1人
前もって記号に気をつければミスが減ると思った	1人

表2 テストを終えての感想

予想よりできていた	16人
苦手な部分があってよかった	14人
自分の傾向が分かり、対策をしたと思った	4人
得意な部分があった	4人
予想よりできていなかった	3人

読譜に関するアンケートによると、これまで楽譜をじっくり見ていたと答えている学生は8人しかいない。他は「多少見ていた」「あまり見ていなかった」と答えている。

測定テスト前後で意識の変化があったかどうかの質問には7割以上の学生がテスト前後では読譜に対する意識が変わったと答えている。その内容は「＃＼を意識するようになった」と答えた学生が最も多かった。そして「拍子やリズムを意識するようになった」「何調かを意識するようになった」「注意深く見るようになった」と続く。多数の学生が、＃＼・拍子・調性・記号、これらを意識するようになったと答えている。

5. 考察

(1) 測定テスト

まず「音判断」は予想通りの結果であるといえる。2度や3度といった近い音の聴き取りは90%の学生が正解しているが、4度音程になると70%、調性判断になると62%の学生しか正解できていないのが分かる。前述したように、ピアノ演奏や弾き歌い能力向上のためには音程の関係を瞬時にイメージできることが重要であり、今後意識的に4度、さらには5度6度といった広い音程の訓練もしていくべきであろう。

調性判断は普段のソルフェージュ講義での学生の調性に対する対応から苦手であろうと予測していた。そのため、比較的易しい選択ができるよう考慮して作成したものである。前述したようにコードネームでの即興演奏の必要性から考えると、調性判断というのは最も重要な要素であるため、今後の対策が必要であろう。

「リズム判断」の正解率を比較してみると、4分音符や8分音符に関するリズムは95%を超えているが、16分音符は83%、シンコペーションになると70%となっている。やはり4分音符や8分音符の単純なリズム判断はできて、16分音符やシンコペーションといった多少複雑なリズムになると判断できていない学生が多い。これは前述したように一定の拍を刻みながら音符の正しいリズムを理解するということできていないことが考えられる。

「読譜能力」はニ長調2分の2拍子 Allegro という子どもの歌に多く出てくる簡単な楽曲の楽譜を見せたが、拍子記号は77%、調号は72%、調判定は62%と正解率が低くなっており、音記号・調性・拍子・楽語等といった、ピアノ経験者では当然見ている部分を理解できていないのがわかる。また、見ていたとしても調性判断のための知識や楽語の知識が足りないため正しく答えられないと窺える。

ここで前期ピアノテストの得点9.5点、8.5点、6点、4点の学生それぞれの音楽能力テストでの点数を見てみる。(図4 5 6 7) 注目すべきは9.5点、8.5点と高得

点を得た学生は「音判断」「リズム判断」「読譜」どれも平均点より正解率が高く、逆に6点、4点の学生は平均点より低いことである。すべてにそれが当てはまるとは限らないが、ピアノ点数が高い学生は音楽能力テストの得点も高い傾向にあり、ソルフェージュ能力とピアノの演奏技術は相互する場合が多いといえよう。

(2) アンケート

7割以上の学生に意識の変化が見られ、「#♭・拍子・調性・記号を意識するようになった」と答えているが、本来これらの意識は譜読みの場合当然見るべき部分であり、これまでの意識の薄さがうかがえる。しかし今回多くの学生に意識変化があったということは注目すべき点であり、今後は「読譜」という意識を持って楽譜に向かうであろう。

さらにアンケート結果で注目すべき点が二つある。一つは「予想よりできていた」という学生が「予想よりできなかった」という学生の数を大きく上回っていることである。前述したようにピアノ初学者が多いということから学生には音楽に対する苦手意識があり、音楽を得意であると自身が持っていないことが窺える。

もう一つはテストを受けた約半数学生が「苦手が分かってよかった」「得意が分かってよかった」等、自身の能力を知ることが出来てよかったと答えている。ここでも得意な部分への自信と苦手な部分を知ったことによる意識の変化が感じ取ることができる。

6. 今後の指導法

今回筆者が特に注目すべきと感じた学生の意識変化は、「譜読みに対する意識」「苦手な部分」「得意な部分」である。「譜読みに対する意識」では、今までできていなかった当然すべき譜読みへの取り組み方を、意識の変化が薄れないよう授業内でも指導していくべきであり、ある楽譜に向かい合った時読譜することが習慣となるようにしなくてはならない。

「苦手な部分」の対策としては、今回学生個々の能力や傾向に合わせた課題プリントを作成し、自習で苦手な部分を克服できるようにした。また講義においても指導者側が学生の特徴を理解した事によって個々の弱点を補えるよう、学生達にはその自覚を持って授業に取り組むよう促すことができるであろう。

冒頭で述べたように、限られた時間での音楽的技術習得は容易ではない現状であるが、今回のテスト結果によって理論で習得したことが必ず実技に反映することを証明することができ、また、多くの学生に前述したよう

な意識変化が見られたことで、理論の授業が譜読みの勉強であること、ソルフェージュがピアノ演奏技術と大きく関わっていることを認識してもらえたであろう。

そして何より、「得意な部分」があると学生達が自信を付けたことはとても重要なことである。これまでの講義では自信がないことで新曲視唱やリズム視唱に消極的な姿勢が多く見られてきたように思えるが、今回自信を付けたことにより、より意欲的にソルフェージュ授業に臨めるであろう。

-
- i 平成 27 年度の学生 68 名に対して入学時に行ったアンケートでは、半数以上の 38 名が初学者クラス希望であり、現在も初学者クラスを受講中である。
 - ii シーショアテストに対し、感覚要素の測定であり総合的な音楽的能力の測定ではないと批判も出た。中でもアメリカの音楽教育家ジェームズ・マーセルは音楽適性テストをめぐり、マーセル学派とシーショア学派との論争を引き起こした。

参考文献

- 高見仁志・前川尚子 (2007 年) 湊川短期大学における「器楽」授業改革の試み ―音楽教育に携わる実践的力量を備えた教師・保育士を養成するために― 湊川短期大学紀要
- 大宮真琴 徳丸吉彦 (1985 年) 幼児と音楽 音楽之友社
- 坂井康子 岡林典子 南夏世 山崎和子 (2006 年) 歌おう弾こう こどもとともに ヤマハミュージックメディア
- 大宮真琴 (1974 年) ピアノ演奏のテクニック 音楽之友社
- 全国大学音楽教育学会 (2001 年) 幼児音楽教育ハンドブック』音楽之友社
- Seashore, Carl E. Lewis Joseph, G (1919 年) Seashore measurement of musical talents. New York: The Psychology Corporation
- Gordon, Edwin (1965 年) Musical aptitude profile Boston: Houghton Mifflin

Thoughts on the effectiveness of solfège in the nursery school teacher and staff training course

Establishing instructional methods and changing student
consciousness through testing musical ability

UCHIDA, Emiko

Abstract

In schools for training teachers for nurseries and schools, students need to learn the basics of music well enough to make practical use of music when actually in the workplace. They are in the difficult situation of having to learn a lot in a short time. On this occasion, in a test of musical ability, we assessed pitch, rhythm, and sight reading in 46 second-year students taking a class on solfège, a method for efficiently learning the necessary basics of music. Based on our observations from exploring each student's ability separately, we discovered topics to consider and worked out ideas on instructional methods. The testing also enabled us to observe how the students would come face-to-face with their own abilities, define topics to work on, and adapt themselves to the challenges of solfège.

Keywords : fundamental knowledge of music, music ability measurement test, sound judgment, rhythm judgment, music reading ability

— 2015.7.28 受稿、2015.11.26 受理 —